抄 録

齒 科 外 科

顎頭ビニ齒牙ノ急性炎症性疾患ノ

治療ニ就テ

Zur Behandlung akut entzündlicher
Erkrankungen der Kiefer und der Zähne
von Dr. Med. W. Weinberger.

Zeitschr. f. Stomatol. 1936. Heft 12

顎部領域ニ於ケル急性炎症ノ過程ハ Kota-
nyi 氏ニ依リ報告セラレタ。非特異性刺激物
療法ニ依リ好結果ヲ期待シ得ルト云フ事ヲ認
メテキル。

既ニ數年來斯ル症例ニ Much 並ニ Fränkel
等ノ Vakzin ヲ使用シテキルガ、就中好結果
ヲ期待シ得ルモノハ Omnadin (I. G.) ニシテ
最近ニ於テハ Kotanyi 氏ニヨリ發表セラレシ
Stormin ヲモ使用シテキル。

此ノ兩製劑ノ利用ニ際シテ何等ノ不快ナ局
所竝ビニ一般作用ヲ認メナカツタ。著者ノ經
験テハ Omnadin ノ方ガ Stormin ヲリモ有效
ト思ハレル。即チ 2—4 cc 量ヲ筋肉内ニ用ヒ
タノミナラズ又何等ノ刺激現象ナシニ皮下注
射ニモ利用スル事が出来タ。

特異性免疫ハ今日尙完全ナル發達ヲ遂ゲテ
キナイガ故ニ、有機體ニ Vakzin ヲ應用スレ
バ防止力ヲ増大セシメ防禦力ヲ或ル時期迄増
加セシメル事が出来ルノデアアル。而シテ一般
狀態ノ好調、體溫ノ下降、疼痛ノ迅速ナル緩
和、或ハ減退ヲモ又期待スル事が出来ルノテ
アル。此ノ Vakzin ハ重篤ナル(潰瘍性壊死性
ノ、口内炎ノ場合ニ苦痛ノ緩和竝ニ疾病期日
ノ短縮ニモ利用セラレル。

Bier 氏鬱血(Biersche Staünung)モ又顎部
領域ノ急性炎症性過程ノ補助療法トナル。

即チ間歇的ニ—1日3回、—1時間位頸部
ニ彈力性帶ヲ卷キツケルノデアアル。斯クスル
ト疼痛ヲ靜止セシメ、牙關緊急ヲ迅速ニ消失
セシメ、壊死部ノ分界竝ビニ局所の防禦力ヲ
高揚セシメルニ好都合ニ作用スル。

次ニX線照射竝ビニ短波長透過モ有效デア
ル。

最近ハ又斯ル症例ニ對シテ化學的療法ヲ試
ミテ居ル。即チ經口のニモ靜脈内ニモ使用シ
得ル I. G. ノ Prontosil ノ使用デアアル。

Prontosil ハ黃赤色ノ Sulfonamido-azo-Far-
bstoff ニシテ Streptokokken 並ビニ Staphylo-
kokken ニヨル種々ノ化膿性疾患ニモ使用サ
レテキル。著者ハコノ Prontosil ヲ 0.3 gr ノ
錠劑ノ形ニシテ使用シタ。先ヅ1日3回食後
1時間シテ細挫シ(口中ニテ)其ノ後水ト共ニ
吞ミ込ムノデアアル。1日1gr、以上ニナルト
左程著シクハナイガ皮膚、粘膜、分泌物或ハ
排泄物ガ黃變スル。然シコノ著色ハ直チニ消
失スルモノデアアル。體溫、一般の狀態、疾患
過程ニ對シテハ今迄觀察セル症例ニ於イテハ
明白ニ非常ニ良好ナ結果ヲ得ル事が出来タ。
更ニ Prontosil ト Omnadin トヲ併用スレバ
非常ニ有效デアアル。

上顎齒槽突起ノ骨髓炎ノ場合ニコレヲ併用
シタガ疼痛ガ迅速ニ消失シ、竝ビニ腐骨形成
ガ促進セル事ハ勿論、關節疼痛モ明ラカニ減
退セルヲ認メル事が出来タ。ト述べ經口の
Prontosil 療法ヲ適當ナ疾患ニ單獨ニ或ハ他
ノモノト共ニ使用スルコトヲ推奨シテキル。

ナホ重症ナ場合ニハ即チ入院セネバナラヌ
様ナ場合ニハ靜脈内ニ 20cc ノ Prontosil ヲ
1日2—3回宛使用スレバ非常ナ效果ヲ期待
スル事が出来ル。種々ノ化膿性狀態ニ對シテ

モ同様デ之ヲ防止シ、或ハ緩和スル事ガ出来ル。口粘膜ノ創傷、竝ビニ潰瘍性腐敗性過程ニ對シテ 0.6%ノ Protosil 液ヲ應用スルコトハ尙實驗中デアル。(丹野啓行)

保存療法科

「アルゼン」ヲ淺キ齒頸部窩洞ニ適用

セル際ノ齒間乳頭腐蝕ニ就テ

Das Verätzen der Papille nach
Legen von Arsenik in zervikal
hochgelegene Kavitäten

Von Dr. Clemens Altenkamp

Zahnärztl. Rundschau. 1936 Nr. 4

屢ク質問關テ淺イ齒頸部窩洞ニ於テ如何ニシテ齒齦縁ノ損傷ヲ豫防スルカ。又ソノ效果ヲ收ムル方法、及ビ齒髓ヲ確實ニ死滅セシムル藥劑、或ハ腐蝕ヲ完全ニ避ケ得ル被覆劑等ト云フ問題ヲ見ル。

一般ニ齒髓失活ノ主ナル失敗原因ハ手術者ガ行フ特別ナ方法デモナケレバ又被覆劑ニ依ルモノデモナクテ、ソレハ常ニ患者ニ疼痛ヲ與ヘル不適當ナ藥劑ニヨルノデアル。

更ニ又齒齦ノ損傷スル責任ハ藥劑デハナク、多クノ場合我々自身ニアルト云フ事ヲ強調シテ居ル。

次ノ2ツノ症例ガ之ヲヨク説明シテ居ル。

1) 拔髓ニ若シ檢定サレタ Causticin rotヲ用ヒタズルト、規則ニハ豫メ石炭酸中デ軟化シタ Causticinヲ開放出血セル齒髓上ニ24時間置ク様ニ書イテアルガ、カ、ル規則ハ大體チヨット眼ヲ通スダケダカラ、Causticinノ處置ニ當リ、此事ヲ忘レテ居ルカラ失敗スル。ソノ理ハ乾燥セル藥劑ノ場合ニハ24時間置クト云フ事ガ、藥劑カラ齒髓ニ、更ニ又ソノ逆ニ液ノ交換ガ行ナハレタルタメニ絶體ニ必要デアル、「Causticin rot」ノ小球ヲ出血セル齒髓上ニ乾燥狀態デ置クナラバ、殆ンド常ニソノ效果ガ遲滯スルダラウ。責任ハ全ク我々自身ニアル。

2) 拔髓ノ失敗責任ヲ藥劑ニ負ハス事デアル。即チ我々が「アルゼン」或ハ他ノ藥劑ヲモウ一度填メテヤリ直シタリ、或ハ簡單ノタメニ齒髓切斷法ヲ行フ場合等ノ失敗ハ藥劑ヨリハ寧ロ用ユル機械ヤ、ソノ操作法ヲ知ラナイ事ニ歸因スル。

擴大不充分ナ根管ヲ通シテハ決シテ拔髓出來ナイ。又數回使用シタ拔髓針デモ同様デアル。著者ノ意見デハ「アルゼン」ヲ靜ニ用ヒ、被覆劑トシテ、「フレッチャー」ヲ用ユルト「アルゼン」ニモ被覆劑ニモ失敗ハナイ。唯形ノ惡イ窩洞ニ填メルノハイケナイ。

形ノ惡イモノ或ハ不適當ナ窩洞デハ「三鹽化醋酸」ヤ「ヨードチンキ」或ハ「マトリツ」ヲ置イテ腐蝕スル事ヲ避ク可キデアル。

完全ニ腐蝕スルニ一定ノ充填量ヲ定メル事モ又腐蝕ノ原因トハナラナイ。我々ハ大體用ヒラレル藥劑ノ有效固有量ヲ知ツテキル。

磷酸「セメント」、「Antinekrosit」ヤ「Certoden」モ、或ハ又窩洞形成ノ惡イ際ニモ齒間乳頭ノ腐蝕ハ避ケラレナイダラウ。

ソノ原因ハ藥劑デハナク間違ツタ治療法即チ我々自身ノ責任デアル。故ニ失敗ノ際ニハ自分個有ノ處置ヲ正シク反省シテ見ル可キデアル。齒髓失活劑ヲ咬合頭ノ窩洞ニ入レルノハ餘リ困難デハナイ。蝕蝕ガ齒頸部即チ多クハ隣切面ニ起ルト齒牙ハ破壊セラレ、齒髓炎ノ疼痛ヲ起シ、爲ニ拔髓竝ニ根管治療が必要ニナル。ソノ際多クノ場合「バー」デソノ側壁上カラ斜メ下、隣接腔ノ齒頸部ノ方ヘ削リ始メル。

斯クシテ生ジタ橫抗中ニ「アルゼン」或ハ他ノ失活劑ヲ入レ都合ノヨイ場合ニハ「セメント」或ハ「フレッチャー」、不都合ノ時ハ「グッペルカ」ヲ閉鎖スル。

次ニ齒頸部ニ於テ珐瑯質陵柱ト象牙質小管ノ走行ハ幾分傾斜シテ居ルガ、殆ンド水平デアル。故ニカ、ル所ヘ「アルゼン」ヲ置クト齒間乳頭ヲ腐蝕スル。